

## サン・テグジュペリの『手帳』の内容と解説

加 藤 宏 幸

私の手もとに、サン・テグジュペリの『手帳』のフランス語版2冊と日本語版2冊がある。フランス語版について言えば、ガリマール書店から1975年に出版されたもの<sup>1)</sup>と同書店から1976年に出版されたもの<sup>2)</sup>である。『サン・テグジュペリ全集』の第7巻である1976年版には、巻末に資料として13枚の写真とラテコエール航空会社 Lignes Aériennes Latécoère の航空路開発計画に関する地図が添付されているだけであって、その内容は1975年版と全く同じである。

日本語版について言えば、みすず書房より刊行された『サン・テグジュペリ著作集』(全7巻)の第4巻として1963年に出版されたもの<sup>3)</sup>と、同じくみすず書房より刊行された『サン・テグジュペリ著作集』(全12巻)の第5巻として1984年に出版されたもの<sup>4)</sup>がある。前者は1953年にガリマール書店より刊行された原本からの訳であり、後者は1975年に同じくガリマール書店より刊行された原本からの訳である。

1953年版と1975年版(または1976年版)の2種類の異なった『手帳』が公刊されている。1953年版の「序」において、編者のミシェル・ケネル Michel Quesnel とピエール・シュヴリエ Pierre Chevrier は次のように述べている。「年代順の尊重は、サン・テグジュペリの思想がどう発展していったか、その意味をとり出せるだけに、是非とも必要なことであった。主題による分類は数多の舌足らずな晦渋な走り書きに方向を与えるという利便があった。／こういうディレンマを前にして、われわれは読者に二つの違った版を提供する決心をした。ひとつはいっさいの原本に手を触れずに年代順のまま、原文を読者の手にわたすこと。他方の版は、主題によってはっきりと分類した頁をひとつの本にまとめたものである」<sup>5)</sup>。1953年版は、年代順を考慮に入れず、『手帳』の断片的な文章を主題別に適

1) SAINT-EXUPÉRY (Antoine de), *Carnets*, Paris, Gallimard, [© 1975], p. 285.

2) SAINT-EXUPÉRY (Antoine de), *Carnets (Œuvres complètes de Saint-Exupéry, tome VII)*, Paris, Éd. du Club de l'Honnête Homme, [© 1976], 427p.

3) サン・テグジュペリ著(宇佐見英治訳)『手帳』(『サン・テグジュペリ著作集』, 第4巻, みすず書房, 1963年, 194ページ)。

4) サン・テグジュペリ著(杉山毅訳)『手帳』(『サン・テグジュペリ著作集』, 第5巻, みすず書房, 1984年, 384ページ, 「索引」11ページ)。

5) サン・テグジュペリ著(宇佐見英治訳)『手帳』, 4-5ページ。

宜捨選択し、4章（「道徳および政治」、「知性および言語」、「宇宙の構造」、「経済」）にまとめたもので、完全な版ではない。他方、1975年版は、『手帳』のすべての文章を年代順に配列したもので、完全な版である。

ピエール・シュヴリエに宛てた手紙において、カミュ Camus は次のように述べている。「打ち明けてお話しすれば、〈宇宙の構造〉を除けば、『手帳』を主題別に分類した方がよかったとは確信をもって言うことができません。なぜなら、主題が明確なものとなるが同時に限定されてしまうからです。また〈経済〉自体に関して言えば、少し一方的に〈政治〉から分離されているにもかかわらず、その分類はどうしても不明確なものになってしまいます。『手帳』Ⅰ（〈道徳および政治〉—筆者注）の多くのテキストは、『手帳』Ⅱ（〈知性および言語〉—筆者注）の中に含まれ得るし、その反対も不可避です。ある作家が言語について語るときは、〈道徳〉についても語ります。要するに、私は完全な年代順の編集の不都合が理解できるけれども、その利点も理解できます。主題別のテキストについては、サン・テックスの読者を信頼しなければなりません、年代順のテキストについては、サン・テックス自身を信頼しなければなりません」<sup>6)</sup>。カミュは、年代順編集による『手帳』の完全な版の出版を奨励した。

テキストの年代順配列を採用した1975年版に従って、『手帳』の考察を進めたい。まず、シュヴリエが「序文」において指摘している数点に注目しておく必要がある。「サン・テグジュペリは、上着の内ポケットに入れて、柔らかい革で装丁された薄い手帳を持ち歩き、そこにさまざまな主題に関する自分の考えを書き留めていた。彼のノートを読むと、後の仕事に要点集として役立つことになるノート、自分自身の思想を明確にするために彼が発展させるノート、彼の中に叫びのように浮かんできたノートを識別することは容易である。／全6冊からなる手帳は、およそ1935年から1942年にわたって一定間隔で配置されている。日付上で最初のもは、この著者がマドリード戦線に関して書いたルポルタージュのために利用されたメモ帳にすぎない（その内容は補遺に示されている）。日付上の最後のものにはアメリカのたくさんの住所が載っているが、多くのページには何も書かれていない」<sup>7)</sup>

「手帳の解説は困難であった。なぜなら、著者が机で書いているときでさえも、ペンの背で小さな字を書き、さらに略字や数学的記号を使用するからである。別の箇所においては、乱れた筆跡から、サン・テグジュペリが車や飛行機の振動する中で書いたことが推察される。／サン・テグジュペリは、自分の手帳を出版しようとは全く考えなかった。これらの手帳には内的種類の打ち明け話は全く含まれていないけれども、死後に残されたこの

6) SAINT-EXUPÉRY, *Carnets*, Gallimard, [© 1976], p. 14.

7) SAINT-EXUPÉRY, *Carnets*, Gallimard, [© 1975], p. 5.

ような文書の出版は（文学史が立証していることであるが）常にいくつかの問題を引き起こす。『考えを明確にしなければならない』と、サン・テグジュペリは繰り返し述べていた。ところで、絶えざる探究の間に書き留められたこれらのノートは、熟考の時間の試練を受けていなかった<sup>8)</sup>

『手帳』が執筆されたのは、およそ1935年から1942年にかけてである。この時期のサン・テグジュペリはどのような生活を送っていたのであろうか。

1935年4月から5月にかけて、「パリ・ソワール」*Paris-Soir* 紙の特派員としてロシアを旅行する。アンドレ・ジャッピー André Japy が保持していたパリ—サイゴン Saigon 間87時間の飛行記録に挑戦する決意を固め、1935年12月29日、機関士プレヴォ Prévot と乗り組んで出発する。カイロの手前200キロメートルのリビア砂漠に墜落し、5日間ほとんど何も食べも飲みもせずに砂漠を歩き続けて、隊商に救助される。

1936年8月、「ラントランジジャン」*L'Intransigeant* 紙の特派員としてスペインに行き、レリダ Lerida 戦線のルポルタージュを書く。1937年6月、「パリ・ソワール」紙の特派員として再びスペインに行き、マドリードとカラバンチェル Carabancel の前線のルポルタージュを書く。

1938年1月、船でニューヨークに渡る。2月、機関士プレヴォを伴い、フェゴ諸島 Terre de Feu を目指して飛び立ち、ガテマラに着く。そこでの離陸の際、長く滑走したが高度をとることができず、地面に激突し、重傷を負う。3月、ニューヨークに戻り療養に励み、その間に『人間の土地』*Terre des hommes* を書き上げる。

1939年7月、サン・テグジュペリは、ギヨメ Guillaumet の操縦する水上機に同乗して北大西洋を横断する。9月1日にドイツに対して宣戦が布告されると、ただちにトゥールーズ Toulouse に動員され、航空技術を講義する仕事を割り当てられる。この仕事には満足できず、戦闘機大隊への配属を求めて奔走する。身体検査の結果不適格となったにもかかわらず、特別のはからいでオルコント Orconte の2/33偵察飛行大隊に配属される。1940年5月にアラス Arras 上空へ偵察飛行を行ったが、その体験は『戦闘パイロット』*Pilote de guerre* という作品の中で詳しく語られる。毎晩飛行大隊は新しい土地に向けて後退し、6月にアルジェ Alger に移る。

フランスとドイツとの間で休戦条約が調印され、1940年8月、サン・テグジュペリは動員解除になる。ただちに船でフランスに戻り、アゲー Agay にある妹の家に身を寄せる。しかし、彼はそのままフランスに留まっていることはできないと思い、アメリカに行こう

8) *Ibid.*, pp. 5-6.

と考える。スペインを通りリスボン Lisbonne に行き、そこから船に乗る計画を立てたが、スペイン内線のときに人民戦線を支援したという理由で入国を拒否される。そのため、アルジェに渡り、モロッコを通りリスボンに到着する。11月、郵便機を操縦していた時期の同僚で、最愛の友人であるギヨメの死を知る。12月、サン・テグジュペリの乗った船はアメリカに向かって出航する。

1940年12月31日、ニューヨークに着く。『人間の土地』が『風と砂と星』 *Wind, Sand and Stars* という題でアメリカで出版されていて、その印税を出版社から受け取ることができたので、生活に困ることはない。

1941年の前半、サン・テグジュペリは絶望に陥っていた。彼の乱れた生活に、フランス人のみならず真面目なアメリカ人も狼狽した。多くのアメリカ人が彼の建設的な活動を心から願っていたにもかかわらず、彼は無為に日々を過ごしていた。6月、『戦闘パイロット』の執筆に着手する。この作品を早く書き上げて、フランスの戦いがいかなるものであったかアメリカ人に理解させなければならない。

1941年12月7日、真珠湾に停泊中のアメリカの艦隊が、日本の海軍航空隊の攻撃を受けて破壊される。翌日、ヒトラーはアメリカに対して宣戦布告する。

『戦闘パイロット』は、1942年2月にアメリカで出版される。すぐに翻訳が、『アラスへの飛行』 *Flight to Arras* という表題で、雑誌に3回に亘って発表される。アメリカでは、この作品は数カ月間ベストセラーになる。

彼は、『星の王子さま』 *Le Petit Prince* や『城砦』 *Citadelle* を書き続けながらも、戦争を忘れることはなく、戦闘に参加しなければならないといつも考えていた。ついに、ヨーロッパでの戦闘に参加できるようになるべき筋に働きかけを開始する。

1942年11月6日、アメリカ軍とイギリス軍が北アフリカに上陸する。1943年3月、サン・テグジュペリは船で北アフリカに向かってアメリカを去る。

6冊の手帳の文章は、およそ1935年から1942年にかけて書き留められたが、サン・テグジュペリがアメリカに滞在していた1941年と1942年には、内容のある文章はほとんど書かれなかったので、『手帳』の実質的な執筆期間は6年間である。6冊の手帳のすべての文章を年代順に配列し1巻本として公刊されたのが、1975年版の『手帳』である。この『手帳』に収められたノートの数に870に達する。「手帳Ⅰ」に315、「手帳Ⅱ」に79、「手帳Ⅲ」に132、「手帳Ⅳ」に163、「手帳Ⅴ」に89、「補遺」に92収められている。それらは単なるノートであって、相互の連関がほとんどない断片である。そこで述べられていることは、政治、経済、宗教、哲学、道徳、人間、文明、言語、文学、精神分析学、科学などのあらゆる分野におよぶ。当然ではあるが、『手帳』は、サン・テグジュペリの他の作品、すな

わち小説、ルポルタージュ、書簡、論文などとは全く異なる作品である。『手帳』を読むことによって、われわれは、彼の他の作品では知り得なかった彼の驚くべき面を知ることができる。彼は人間社会のあらゆる事柄について研究し熟考していた。

『手帳』の最後に編者シュヴリエによって作成された「索引」が付されているが、これは読者にとっては大変便利である。その「索引」の項目は約650に上る膨大なものであるが、その中から数項目を抽出し、それぞれの主題についてサン・テグジュペリがどのような考えを持っていたかを明らかにしてみたい。

### 1. ドイツ Allemagne

ドイツについては、ノートの11箇所で述べられている。それらは1930年代に書かれているので、サン・テグジュペリの関心は主としてヒトラーのドイツに向けられている。ヒトラーがドイツ国民を引き付けたのは、問題を単純化する能力があったからである。「一度ヒトラーと会見したことがある B. de J. (ベルトラン・ド・ジューヴネル Bertrand de Jouvenel——筆者注) が彼の成功の深い原因について尋ねたとき、ヒトラーは次のように答えた。『皆は私の声、人を魅惑する私の才能、演説家としての私の才能について話している。それはくだらないことだ！ 私の秘訣はずっと単純である。混乱がドイツ人の精神を支配していた。私は彼らのために問題を単純化したのだ』。これこそ、総合という操作の定義そのものではないだろうか。総合という操作の唯一の目的は、真実を≪単純化する≫ことではないだろうか。それは、世界を単純な（それ故首尾一貫した）ものにすることではないだろうか」（『手帳』Ⅱ33——以下『手帳』省略<sup>9)</sup>。ヒトラーの教義は一つの総合に類似していた。「ヒトラーの首尾一貫性がドイツ人の夢をかなえるのに十分であったということは、その夢が大したものや要求していなかったことを証明するにすぎない。言い換えれば、ドイツ人は意識の段階においてそれほど高められていなかったということである。それでもやはり、ヒトラーの教義が人々を改宗させたのは、ヒトラーの証言そのものによれば、まさしくその教義が一つの総合に類似していたという限りにおいてである」（Ⅱ33）<sup>10)</sup>。「私は、ヒトラーの個性がドイツを救ったのだと信じたい。ドイツの状態がヒトラーを出現させたのだと信じたい」（Ⅲ94）<sup>11)</sup>

『手帳』には、ヒトラーやナチズムやファシズムを非難している文章を見つけることはできない。サン・テグジュペリは、ドイツ国民を一致団結させたヒトラーのやり方、すなわち「問題の単純化」、「総合という操作」に強い関心を示しているだけである。そのよう

9) *Ibid.*, p. 110.

10) *Ibid.*, p. 110.

11) *Ibid.*, p. 152.

な非難は、彼の他の作品にも認めることはできない。ヨーロッパで行われている戦争の真実をアメリカ人に知らせるために書かれた『戦闘パイロット』にさえも、ドイツを非難する言葉はほとんどない。この作品は1942年2月にアメリカで出版され、すぐに英訳（『アラスへの飛行』）され、多くのアメリカ人に読まれた。フランスの占領地域にも届き、ドイツ軍の検閲に付されたが、「このばかげた戦争を始めたのはヒトラーだ」という文の削除を命じられたが、出版は許可されている。

ドイツやヒトラーを厳しく非難しなかったために、サン・テグジュペリはドイツ協力者ではないかと疑われた。1940年12月31日にニューヨークに着いた彼は、昔の友人に再会し、新しい友人も見つけたが、彼に敵対する驚くべき数のフランス人がいるのを発見し驚いた。ニューヨークのフランス人は、ベタン Pétain 派、ド・ゴール de Gaulle 派、無党派の三つのグループに分かれていた。フランス人同士が侮辱し合い、密告し合って、互いに激しく相争っていたが、彼は争いに加わることを避けた。

特にド・ゴール派のサン・テグジュペリに対する非難は厳しかった。その派の人たちは、彼をドイツ協力者、ヴィシー派であると見做していた。1941年1月末、ヴィシーの国民会議 Conseil national の一員にサン・テグジュペリが任命されたという知らせが、ニューヨークで放送された。国民会議は150人の著名人で構成された机上の会議であって、国家元首が祖国再建のための知恵を求めることを目的としたものである。非難の叫びが上がったので、彼は記者会見を行い、その任命はヴィシー政府によって一方的に行われたことを説明した。もちろん彼はヴィシー政府に拒否の返答をしたが、彼にたいする非難は鎮まらなかった。

1942年11月29日、サン・テグジュペリは、「ニューヨーク・タイムズ・マガジン」*New York Times Magazine* に、「至る所にいるフランス人への公開書簡」*Lettre ouverte aux Français de partout* を発表した。彼はフランス人が党派に分かれて争うことを止め、団結して祖国のために闘うべきことを訴える。この訴えに、ドゴール派の人たちは怒った。すべてのフランス人を同列に置き、ヴィシー政府の罪を許すものだ、と中傷した。彼はナチ、ファシスト呼ばわりされた。

サン・テグジュペリは、自らの行動によって、彼に対して向けられた非難・中傷が全く不当なものであることを証明した。1943年5月にアルジェリアに着いた彼は、従軍パイロットの年齢をはるかに超えていたにもかかわらず、懸命に奔走し、2/33飛行大隊に復帰した。当時世界最大のスピードを有していたライトニング Lightning 型機に乗りドイツと戦い、1944年7月31日、コルシカのボルゴ Borgho 基地から飛びたっただけで戻ってこなかった。

## 2. 愛 amour

愛については、ノートの16箇所で述べられている。サン・テグジュペリが愛と呼ぶものは、キリスト教の愛そのものである。人間の心に愛を産み出すのは、毎日の祈りである。「乾いた魂に愛を産み出させるためにあの長い努力があったことを人々は少し忘れ過ぎている……。まず心を教育することを目指す毎日の祈り（愛される神の本質はいつでもよい）のあの素晴らしい努力のことも忘れてる」（I 20）<sup>12)</sup>。愛は無償である。「報酬について話すために私のところに来ないでほしい。兄が弟を救うために徒刑場に出かけるとき、宗教がなくてもそうするだろうことはよく分かる。彼にとっては、報酬は表明した愛だけで十分である。しかし、この優しい兄は死ぬかもしれない。そのとき、神はこのような行動をどんなに容易にしてくれることであろう。神は、漠然とした心の動きをなんと明瞭で望ましいものにしてくれるであろう！（まさしくこの愛は、すでに神的なものの象徴にすぎなかったのである）」（I 24）<sup>13)</sup>

サン・テグジュペリによれば、真の愛とは愛する相手から何も求めずに愛することである。「真の愛は、その見返りとしてもはや何も期待しないところに始まる。人間に人間に対する愛を教えるために、祈りの実行があんなにも重要なものとして示されるのは、祈りに対して答えはないからである」<sup>14)</sup>。真の愛とは、与えるだけの愛であって、受け取る愛ではない。真の愛とは、《愛する》ということではなく、《愛さなければならない》ということである。与える愛が何らかの障害があって愛する人に届かない場合には、愛する人からの見返りは全く期待できない。このような状況においても愛し続けるとき、その愛は偉大である。「そして私は、おまえに言う。逸する機会こそ重要な機会である。牢獄の壁を通しての愛情、おそらくそれこそが偉大な愛情である。祈りは、神が答えないかぎりにおいて豊かなのである。愛を豊かにするのは、火打ち石であり茨である」<sup>15)</sup>

サン・テグジュペリはリビア砂漠の真ん中に墜落したことがあった。彼は翼の破片を積み重ね、それに火をつけ、自分の存在を人々に知らせようとした。彼は砂漠の中に燃え盛る火を眺めながら、「このメッセージは悲壮な叫びを運んで行くと同時に、またそれはたくさんの愛情も乗せて行くのだと思う」<sup>16)</sup>。しかし、この呼び掛けに対する答えは全くなく、燃える火とともに運ばれて行った彼の愛情に対する答えもない。砂漠という障害があったために、彼の愛情は愛する彼の家族や彼の同僚に届かなかったが、それでも彼は愛情

12) *Ibid.*, p. 16.

13) *Ibid.*, pp. 17-18.

14) SAINT-EXUPÉRY (Antoine de), *Citadelle* (*Œuvres*, Colletion *Bibliothèque de la Pléiade*, Gallimard, [© 1959], p. 647).

15) *Ibid.*, p. 639.

16) SAINT-EXUPÉRY, *Terre des hommes* (*Bibliothèque de la Pléiade*, p. 222).

を与え続ける。これこそが真の愛である。

また『星の王子さま』の王子は、肉体を脱ぎ捨て魂だけとなってバラの花のもとに戻ることによって、バラの花に愛情を与えた。王子の愛情はバラの花に届きはしたが、バラの花はその愛情を知ることがなかった。王子の無償の愛も偉大である。自分を豊かにするために与える愛、それが真の愛である。「真の愛はなくなることがない。与えれば与えるだけ、多くの愛がおまえに残る」<sup>17)</sup>

サン・テグジュペリにとっては、真の愛とはキリスト教の愛であり、無償の愛である。

### 3. 芸術, 芸術家 art, artistes

芸術と芸術家については、ノートの22箇所ですべて述べられている。サン・テグジュペリは時間をかけて芸術作品を制作する芸術家の存在を容認しない社会主義社会を糾弾し、芸術と芸術家の価値を認める社会を望む。「社会主義が構造を修正するのは、そのモラルが次のようなものだからである。金銀細工師よ、画家よ、哲学者よ、あなたがたは労働者の生産物を消費しているのであるから、労働者の血を摂取していることになる。だから、あなたがたもまたキャベツを栽培しに行きなさい。あなたがたには、すべての人に分配できない美術工芸品のような物を制作する権利はない。その制作には人間の労働時間をあまりにも必要とするからである。誠意をもって作品の制作に取り組む人、中国の茶碗を描く人、祭壇布に刺繍をし装飾する人、モザイクを制作する人、この人たちはすべて背徳者である。大量生産方式で生産する人の活動だけが道徳的なのである。なぜなら、その人の活動の受益者であることは特権にすぎないだろうからである。だから、その〈社会〉は、もはや光を目指すことはないし、もはや花を作るように美術工芸品を作ることもないであろう。〔……〕しかし、われわれは、もしその詩が美しければ、それは人間の生活のたつぷり1年分に値したと信じている。熱烈な女性信者の手によって刺繍された上祭服や1本の線を純化するために芸術家とその生涯を燃焼させた中国の茶碗の場合も同じである。われわれは、人間の尊厳を作品の中に同化させるためには自己を犠牲にしなければならないと考えている。この神秘的な崇拜の力を信じるわれわれは、何よりもそういうことを許す社会を望んでいる」(Ⅲ41)<sup>18)</sup>

サン・テグジュペリは、集団が重視され個人が無視される社会を拒否する。そのような社会においては、自らの能力において芸術作品を産み出す芸術家や芸術家を庇護する者は排斥されるからである。「なぜなら美術工芸品は集団によって得られるものではないからである。そのようなことをすれば、美術工芸品からあらゆる人間的意味が奪われてしま

17) SAINT-EXUPÉRY, *Citadelle*, p. 778.

18) SAINT-EXUPÉRY, *Carnets*, [© 1975], pp. 136-137.



う。大衆の平均的好みは、彼が憎むもの、つまりロシア的なものに至ってしまう。その上、常に物質の問題が問われることになり、十分な小麦がないときに愛のソネットを書く人は、どんでもない不道德な人と言われるであろう。だから、彼は大地を耕しに行かなければならない。なぜなら、実際にロスチャイルド Rothschild<sup>19)</sup> が彼の金によって愛のソネットを楽しんだとして非難されるとき、彼が非難されるのは、この詩人が大地を耕すことを彼が妨げた点である」(Ⅳ23)<sup>20)</sup>

知的な社会主義者が芸術を殺している。「しかしながら、われわれは文明人であるが、文明人が専念する芸術——文明人が相手にする人間、それらを文明人は殺している。ロシアにおいてもわが国においても、知的な社会主義者がそのようなことをしている。なぜなら、実際には芸術を提供することではなく芸術の条件を提供することが問題なのだが、その条件は不可解だからである」(Ⅳ62)<sup>21)</sup>

サン・テグジュペリは、社会主義社会では芸術と芸術家の存在は無視されていると論じ、この面からのみ社会主義社会を批判している。『手帳』には、社会主義に関する政治および経済などの面からの考察はない。

#### 4. 文明 civilisation

文明については、ノート<sup>33</sup>箇所で述べられている。都市文明に対する批判。「人間と森。もはや人間以外何も存在しないときが来れば、人間はすっかりうんざりしてしまうであろう。人間はすでに野獣との接触(《真の》狩りから帰る喜び)を失い、部分的ではあるが自然の力との接触を失ってしまい(都市文明)、今や人間は地球を菜園に変えている」(Ⅰ137)<sup>22)</sup>

機械の使用による進化に対する批判。「機械の使用による進化は、ある面では災難である。この進化によって、人間は概念の文明 *civilisation conceptuelle* から追い出され、人間のタイプがあまりにも急速に変化させられるので、人間はあるタイプの人間に決してなれなくなってしまっている。機械の使用停止=創造することが可能なタイプの人間。そしてこの場合、ついに静止した技術が導いて行くのは、蟻塚の方へではなく、結局は文明の方へである」(Ⅰ159)<sup>23)</sup>

共産主義社会においては、体制に対立する思想は排除され、体制に適う思想のみが助長されるので、文明の進歩はない。「共産主義体制では、国家が封建領主の役割を演じ、文

19) ユダヤ系の大資本家一族。

20) SAINT-EXUPÉRY, *Carnets*, [© 1975], pp. 170-171.

21) *Ibid.*, p. 186.

22) *Ibid.*, p. 42.

23) *Ibid.*, p. 47.

明を養う。しかしその場合には、別の重大な不都合が生じるが、それについては後で論じることにする。(ソ連の場合には不安を感じる)。主義の単一性。／多くの文芸庇護者はあらゆる傾向を助長するが、国家は一つの傾向、まさしく壁で囲まれた傾向しか助長しない。現行の体制と本質的に対立する概念の創造にとりわけ歯止めをかける。人々は現行の体制のあらゆる成果を——おそらくよりうまく——引き出すであろうが、その後はもはや進歩しないであろう。二流の文芸庇護者はどこに行くのだろうか。ソ連では、ブルトンやアラゴンを誰が養うことができたであろうか」(Ⅱ 6)<sup>24)</sup>

文明は余暇ではなく仕事である。「生産を最大にし余暇を最大にするためには、どのように移住 migration を実現すべきか——しかし、余暇は文明なのだろうか。いいえ、文明は仕事であり、しかも画家や古文書学者の仕事である。これらの人々の活動を、余暇によって生まれた自由にできる時間の部分に加えることはできない」(Ⅲ 37)<sup>25)</sup>

技術や機械の急速な発達は人間の生活水準を向上させ、新しいタイプの人間を産み出したが、それによって文明は進歩したであろうか。サン・テグジュペリは、それに対しては否定的である。直接社会に役立つ人間や物が重んじられるようになり、過去の文化的遺産や直接社会に役立たない文化またはそれを産み出す人たちが軽視されるようになった。機械の発達によって余暇が生じたが、余暇によって文明が進歩することは決してない。文明の進歩は、創造的な人間の厳しい努力とその人間に対する社会的尊敬によってもたらされる。

## 5. 概念 concepts

概念については、ノートの73箇所ですべて述べられている。サン・テグジュペリがこんなにも多くの箇所で言及している概念に、彼はいかなる意味をもたせているのであろうか。

概念は世界を知る基準である。「私は、デカルト以前に生きた人々に、彼らが特定の概念に従って考えれば、世界が彼らにどんなに明らかなものに見えてくるかを理解させることはできない」(Ⅰ 1)<sup>26)</sup>。サン・テグジュペリによれば、概念が誕生したのはデカルト以後である。彼の言う概念には、デカル的な合理主義的思考が含まれている。さらに、かれの概念は真理そのものである。「私は、象徴的な真理以外の他の真理には到達することができない。私の言語の次元においては、私の概念こそが真理である」(Ⅰ 296)<sup>27)</sup>

概念は自己の内部に突然生まれ、その後に言語による説明がなされる。「概念、私はそれが私の内部に生まれるのを待ちさえすればよい。私は、《概念を探しに行く》いかなる

24) *Ibid.*, p. 93.

25) *Ibid.*, pp. 134-135.

26) *Ibid.*, p. 11.

27) *Ibid.*, p. 76.

手段も持たない。概念は——それは当然であるが——自分がたどらなければならない道を全く知らない。《突然の現動 *actes brusques*》があるだけであり、ついで新しい言語によるより広範な一般的説明が行われる」(Ⅲ62)<sup>28)</sup>。概念は、ある一つの存在となるものを定義する理念である。「概念は定義を含んでいるが、それに先行する。概念は、あるものを定義する理念である。(あるものとは、それ以前には全体にすぎなかったが、一つの存在となるものである)」(Ⅳ155)<sup>29)</sup>。概念の創造とは何か。「一つの概念の創造とは、ちぐはぐなものの中に一つの全体を、ある構造あるいは条件反射によって結ばれる関係の網の目を創造することである」(Ⅴ58)<sup>30)</sup>

最高の概念を所有できれば、この上ない幸福が得られる。「この上ない幸福とは最高の概念をもつことであり、世界を統一するある《観点》に到達することである」(Ⅳ140)<sup>31)</sup>。概念の豊かさから明晰さが生まれる。「人は真理を発見するのではない。真理を創造するのである。真理とは、人が明瞭に表現するものである(そうであるけれども、しかしあなたの明瞭さは概念の豊かさから生まれる)」(Ⅰ162)<sup>32)</sup>。概念を獲得することによって人間は進歩する。「今日の人間は洞穴時代の人間よりも生物学的には進歩していないが、概念では進歩している」(Ⅰ261)<sup>33)</sup>。「人間が進歩するのは人間が概念を獲得するからであって、人間が進歩するから概念を獲得するのではない」(Ⅰ286)<sup>34)</sup>

以上、『手帳』の中からサン・テグジュペリが概念について述べた主要な言葉を列挙してみた。彼によれば、概念とはデカルト的な合理主義的思考を意味し、言語の次元では真理を意味する。人間は概念を獲得することによって、世界を明瞭に理解できるようになり、ちぐはぐなものの中に一つの全体を認めることができるようになる。さらに、概念を獲得することによって、人間は進歩し、この上ない幸福が得られる。要するに、サン・テグジュペリの言う概念とは、世界をそして事実を正確に理解できる理念であると言えよう。

## 6. 創造 *création*

創造については、ノートの29箇所ですべて述べられている。サン・テグジュペリは人間の創造力について自分に問う。「人間について、私は『人間の法則の価値とは何か』と自分に問うことはないが、『人間の創造力とは何か』と自分に問う」(Ⅰ283)<sup>35)</sup>

28) *Ibid.*, p. 142.

29) *Ibid.*, pp. 214-215.

30) *Ibid.*, p. 235.

31) *Ibid.*, p. 211.

32) *Ibid.*, p. 47.

33) *Ibid.*, p. 69.

34) *Ibid.*, p. 73.

35) *Ibid.*, p. 73.

創造と論理との関係。「創造はまさしく論理が終わるところから始まる。論理が提出された構造 structure の有効性を認める限りにおいて、世界の創造はない。論理がすでに挫折したところで、創造が始まる」(I 307)<sup>36)</sup>。「私がかん験的に知っていることは、いずれにしても、把握すべき対象を把握するためには、《創造の説明》のためには、論理的用具は先験的に無効であったということである。繰り返して言うが、まさに論理が無効にならない限り創造は存在しないからである」(I 308)<sup>37)</sup>

管理は創造にとって有害である。「しかし、おそらく管理は創造にとって有効ではない。創造は絶え間ない選択であり、あらかじめ決定された論理的発展ではない。ここには目的論は存在しない」(II 22)<sup>38)</sup>。創造とは構造の型を変えることである。「創造作用は、構造の型を変える可能性にある。つまりそれは、言葉の面では言葉にだまされないようにすること、概念の面では概念にだまされないようにすることを創造者に要求する」(IV 92)<sup>39)</sup>

サン・テグジュペリは、人間の創造力・創造性を重視した。創造とは構造の型を変え、新しい構造を確立することである。創造は論理に頼ることによってではなく、論理を排斥することによって行われる。予め定められた目的に向かうのは創造ではない。創造とは、不確かなものに向かって進む行為である。

## 7. 神 Dieu

神については、ノートの24箇所でも述べられている。サン・テグジュペリにとって、神はいかなる存在であったか。「神は、近寄りがたく絶対的なものの完璧で象徴的な支えである」(I 36)<sup>40)</sup>。「私は、神以外のものから権威を産み出すことの困難さにぞっとする。高い所から種はまかれる」(I 94)<sup>41)</sup>。「道徳的束縛はわれわれの邪魔になることはない。われわれはそれを願っている。われわれは、強い人間を形成するには厳しい掟が必要であることをよく知っている。人間が神を考え出したことは、われわれを掟に従わせる助けになるであろう」(II 20)<sup>42)</sup>。「デモクラシーにおいて、私はこの悲惨な個人を救う。しかし、真の西洋文明において私は神を救う。人間の権利ではなく、人間を通して神の権利を救う。私は神を——人間の中にある神の姿を——尊敬するが、個人を尊敬しない」(V 31)<sup>43)</sup>

サン・テグジュペリは、神や信仰について学問的に考察はしていない。絶対的で完璧な

36) *Ibid.*, p. 80.

37) *Ibid.*, p. 81.

38) *Ibid.*, pp. 102-103.

39) *Ibid.*, p. 194.

40) *Ibid.*, p. 20.

41) *Ibid.*, p. 32.

42) *Ibid.*, p. 99.

43) *Ibid.*, p. 228.

神を人間が創造したことによって、人間は頼れるものを見出すことができた。神は苦しむ人を苦しみから解放してくれることもあり、行動の指針を求める人にそれを与えてくれることもある。サン・テグジュペリにとって、神は生活上における不可欠の存在である。彼の神の存在の認識は感覚的である。

## 8. 言語 langage

言語については、ノートの54箇所ですべて述べられている。サン・テグジュペリは、言語の働きについて次のように述べている。「人間は、力 *pouvoir* を自然現象の領域に属すると考えている。そして、言語を練り上げることを学問と呼んだ。デカルトは、言語が有効な働きをすることができることを人々に教えた。人々は、言語の領域では、いくつかの異なる観点があれば、それだけで世界に秩序と無秩序が創造できることや、秩序が言語の一形態にすぎないことを認めている」(I 1)<sup>44)</sup>。「そうだ、おそらく人は器用なのである。しかし、言語との関連においてそうなのである。人は、外見を信用して、器用さが世界を導いていると信じているが、実際に導いているのは言語である」(I 17)<sup>45)</sup>。「私は、言葉 *mots* によって世界を所有する」(I 55)<sup>46)</sup>

知性と言語。「結局、もし知性が豊かな言語 *un langage fertile*, つまり矛盾する真理を何も失うことなく吸収し、混合することによってではなく乗り越えることによって調整する言語をもたらすならば、知性は遠慮せずには必ず支配する」(IV 119)<sup>47)</sup>。認識と言語。「認識とは、真理を所有することではなく、首尾一貫した言語を所有することである」(IV 140)<sup>48)</sup>。言語の特性。「言語は、すべてを運んだりすべてを包含することはできない。なぜなら、(犬におけるように) 名付けられていない、おそらく無数の構造が存在するからである。それらの構造は、ちぐはぐなものの一部全体をまるごと結び付ける条件反射によって規定される」(V 62)<sup>49)</sup>。「言語は、述べることはできるが把握することはできない(包含することはできない) というのは真実である」(V 78)<sup>50)</sup>

今日の世界を考えることができる言語をわれわれは所有しているであろうか。「今日の世界について考えること。それは十分な仕事、十分に実り豊かな仕事ではないだろうか。今日の諸矛盾を明晰な言語で誰も私に解明してくれないのに、人間が把握できない明日の世界をどうして私が信じたりするであろうか」(IV 34)<sup>51)</sup>。「人間は、今日の世界を考える

44) *Ibid.*, p. 11.

45) *Ibid.*, p. 16.

46) *Ibid.*, p. 23.

47) *Ibid.*, pp. 203-204.

48) *Ibid.*, p. 211.

49) *Ibid.*, p. 235.

50) *Ibid.*, p. 238.

51) *Ibid.*, p. 175.

ための言語を持たない」(IV68)<sup>52)</sup>

人間を戦争へ駆り立てたのは言葉である。「人間が戦争を愛し得るとは考えがたい。あの国民が戦争に出かけるとき、われわれはヒトラーのような狂気を作り出す。破局(言葉の錯乱, 誇大な宣伝)を産み出したのは《言葉》である。反対に奇跡をなし遂げたのも言葉である」(IV161)<sup>53)</sup>

サン・テグジュペリは、人間社会において言語が果たしている重要な働きを明らかにした。世界を導いているのは言語であり、世界についてわれわれが考えるときに使用するのも言語である。破局を産み出すのも、奇跡をなし遂げるのも言語である。

### 9. 論理 *logique*

論理については、ノートの21箇所述べられている。論理は、人間の持つ不合理的なものに優先することはない。「論理は、人間の持つある不合理なものに優先するか。そのようなことは絶対はない」(I138)<sup>54)</sup>。論理には、説明する力はあるが、創造する力はない。「たとえ論理に説明する力があるとしても、どうして創造することができるだろうか。私は、ある肉体を分解することはできるが、その分解したものを正しい位置に置き、よい部分を選び、それらを調整することによって、生命を創造することはできない。生命は創造的火花であり、それが生命に点火する。いかなる論理もそれを説明することはできない」(I308)<sup>55)</sup>

矛盾を恐れ論理的であろうとすべきではない。「私は矛盾したことを言うのを少しも恐れない。矛盾はその対象をまだ把握することができない言語の口ごもりにすぎないことを知っているからである。矛盾を恐れ常に論理的であろうとする人は、自分のうちにある生命を殺してしまう」(IV133)<sup>56)</sup>

サン・テグジュペリは、この世のすべての現象が論理によって説明されるとは考えない。人間は多くの不合理なものを持ち、矛盾したことも言う。しかし、これこそが人間に創造力を産み出させるのである。

### 10. 宗教 *religion*

宗教については、ノートの66箇所述べられている。サン・テグジュペリは宗教の価値を認める。「次のような観点をはっきりと認めること。この宗教がなければ、人間は野蛮

52) *Ibid.*, p. 187.

53) *Ibid.*, p. 216.

54) *Ibid.*, p. 43.

55) *Ibid.*, p. 81.

56) *Ibid.*, pp. 206-207.

人へと向かう」(I 21)<sup>57)</sup>。科学が宗教的驚異を次々と排除している今日、過去に立ち戻り、宗教的驚異を信じなければならない。「世界の分析によって、私が驚異を信じるのが難しくなってしまった今日、私は分析することを知らなかった時代の驚異を信用しなければならない。科学がたくさんの退却陣地を激しく攻撃している今日、私はそれに邪魔されないで、自分の信ずるところで次々とそれらを占領しなければならない」(I 97)<sup>58)</sup>

今日、宗教はその力を世界に示していない。「しかし、キリスト教は、ローマ世界においては何物とも対立していなかった。今日、キリスト教は、私が執着するのが当然である私の思想上の問題と衝突している。私は宗教的価値にも執着している。しかし、宗教的価値がもはや世界を和解させず、それがローマ世界に提示したあの明白な総合をもはや提示しないことを私が残念に思うのは当然である」(I 98)<sup>59)</sup>。今日、宗教は後退している。「その点で、宗教の後退は災害であり、それがわれわれの精神的世界を貧困にする(喜びに満ちた中世の1週間や典礼の1年はある顔を持っていた)」(I 262)<sup>60)</sup>

現代は宗教を必要としている。「われわれに返せ、とまず人々は叫ぶ。《永遠》をわれわれに返せと。われわれは、勝手なものや遊びにすぎないダンスを発見してひどく震え上がっている。われわれにわれわれの宗教を返せ。たとえ、それが家族の祝い、誕生日の祝い、祖国の祝い、私が植え、息子が育てるであろうオリーブの木の祝いの宗教であってもかまわない——われわれがそうであるところのもの、われわれ自身を超えて持続するものをわれわれに返せ」(I 281)<sup>61)</sup>。宗教はわれわれに服従することの必要を教えてくれる。

「道徳的束縛はわれわれの邪魔になることはない。われわれはそれを願っている。われわれは、強い人間を形成するには厳しい掟が必要であることをよく知っている。人間が神を考え出したことは、われわれを掟に従わせる助けになるであろう」(II 20)<sup>62)</sup>

サン・テグジュペリは、現代における宗教の後退を嘆いた。人々は宗教的驚異を信じなくなってしまうし、宗教はその力を世界に示さなくなってしまう。今日こそ、われわれを道徳的に束縛してくれる宗教が必要である。

## 11. 社会主義 socialisme

社会主義は先験的に正当化されない。「Bの根本的な誤りは、社会主義について先験的に合理的な正当化を行うことができると考えていることである(そうであれば、社会主義

57) *Ibid.*, p. 17.

58) *Ibid.*, pp. 33-34.

59) *Ibid.*, p. 34.

60) *Ibid.*, p. 69.

61) *Ibid.*, pp. 72-73.

62) *Ibid.*, p. 99.

は結果より先に正当化されることになるだろう」(I 34)<sup>63)</sup>。社会主義はファシズムほど人間を高揚させない。「偉大さは、まず——そして常に——自分の外にある目的から生まれる(アエロポスタル社)。自分を自分自身の中に閉じ込めるやいなや、人間は貧しくなる。自分に仕えるやいなや、人間は貧しくなる。まず個人の豊かさを説く社会主義は、外にある何かへの犠牲を説くファシズムほど人間を高揚させない。(この何かの名前はいつでもよい。)象徴を保証するものが象徴以上に重要である。例えば《祖国》は、宗教版画における神と同様に《ばかげたもの》ではない。ファシズムのこの魅力を否定しても無駄である。ファシズムは歴史的事実である」(I 253)<sup>64)</sup>

資本の利己主義が人々を社会主義へ向かわせる。「多くの人が認めているように、資本自体は《利己主義》である。しかし、それは利潤がその方向を見失う場合においてである。この利己主義は新しいものである。この新しい利己主義に対する新しい感情が、事実上の社会主義へ向かわせる要因の一つである(金利と利潤の漸進的廃止)。それは社会主義的政治闘争とは無関係である」(II 19)<sup>65)</sup>

「3. 芸術、芸術家」のところですでに触れたように、サン・テグジュペリは、社会主義の次のようなモラルには批判的である。それは、労働者の血を摂取し、多くの時間を費やして作品の制作に取り組む芸術家は背徳者であり、生産に従事する労働者の活動だけが道徳的であるというモラルである。彼は、このモラルに律せられた、芸術家の存在を認めない社会主義を容認できない。彼は、他の面から社会主義を見ることはせず、主としてこのモラルの面からそれを考察し、社会主義に未来はないと言う。「さらに、いかなる解決も絶対ではない。全体的に考えてみて、社会主義が未来であると言える明白な徴候は少しもない。正しく考えられた資本主義であれば、存在できるであろう」(II 286)<sup>66)</sup>

## 12. 真理 vérité

真理については、ノートの38箇所ですべて述べられている。サン・テグジュペリによれば、人にとってはその人自身の概念 *concept*こそが真理である。「ネオ・カトリック教徒たちは——マリタン<sup>67)</sup>——彼らの信仰において、もはや原典の歴史的批評において攻撃されなくなると……自分たちがどうして論理の外にいてもとまどうことがないのかを明確に説明することができない。しかしながら、彼らは正しいのである。彼らは自分たちの概念を真理と見なし、それを救う権利を持っている」(I 29)<sup>68)</sup>。「私は、象徴的な真理以外の真理に

63) *Ibid.*, p. 19.

64) *Ibid.*, p. 66.

65) *Ibid.*, p. 98.

66) *Ibid.*, p. 73.

67) ジャック・マリタン (1882—1973)。フランスの哲学者。トマス・アクイナスの哲学の解釈者。

68) SAINT-EXUPÉRY, *Carnets*, Gallimard, [©1975], p.18.



は達することができない。私の言語の次元においては、私の概念こそが真理である」(I 296)<sup>69)</sup>。真理は先験的に正当化されることはない。「私は、概念が自然の中に創造する秩序を手がかりにして、真理を把握する。私の真理は決して明白なものではなく、決して先験的に正当化されるものでもない」(I 32)<sup>70)</sup>

真理を創造するのは言語である。「アインシュタインの理論ではなく中国の小説の場合には、どうして人はかくも直接的に概念の虚構の中に入り込めるのだろうか。私は問題を提出するだけにしておけるが、それは真理を創造する強力な言語の力によるのではなかろうか」(I 145)<sup>71)</sup>。「人は真理を発見するのではなく、真理を創造する。真理とは、人が明晰に表現するところのものである」(I 162)<sup>72)</sup>。真理が明白なものとなるのは、創造の後においてである。「明白さ、論理、演繹は実体のない亡霊にすぎない。一つの真理は明白な、論理的な、演繹されたものと《なる》が、それは創造的な行為の後においてである」(V 53)<sup>73)</sup>。「生来の秘密があれば、人は偶然にその秘密を見つけることができるであろう。そのような秘密は存在しない。創造だけが真理を確立する」(II 76)<sup>74)</sup>

サン・テグジュペリによれば、その人の概念がその人にとっての真理である。真理は言語によって創造され、明晰に表現されたものが真理である。

『手帳』の巻末に編者シュヴリエによって付された「索引」の約 650 に上る項目から分かるように、サン・テグジュペリは、彼の手帳に書き留めた 870 に達するノートにおいて、人間社会のあらゆる事柄について論じている。それらのノートは、時と場所を選ばず、思い付いたときに記されたものである。それらは単なるメモにすぎず、公表する意図をもって書かれたものではない。そのためかえって、それらのノートには彼の考えがむきだしのまま述べられており、主題ごとに整理して読むとき、その主題に対する彼の純粋な考えが把握できるように思える。

私は12の主題に限定して、その主題に関係するノートを調べてみた。その結果、それぞれの主題についてサン・テグジュペリがどのような考えを持っていたかをかなりよく知ることができた。この膨大なノートを年代順に一つ一つ読むことは、その時期に彼が関心を持っていた問題を知ることができるので意義がある。しかし、「索引」を参考にして、それらを主題ごとに整理して読むとき、その主題に対する彼の考えを一層よく把握できるように思える。その意味で、『手帳』はサン・テグジュペリの文学をより深く理解するため

69) *Ibid.*, p. 76.

70) *Ibid.*, p. 19.

71) *Ibid.*, p. 44.

72) *Ibid.*, p. 47.

73) *Ibid.*, p. 234.

74) *Ibid.*, p. 119.

の貴重な資料であると言える。